

会報



第26号

編集・発行人 支部長 浅子 逸男

一冊の本がガラッと変わった。

浅子 逸男

四十年ぶりの出版である。フィリッ
プ・ロスの『素晴らしいアメリカ野
球』。昨年新潮社から刊行された。原
題は“The Great American Novel”。
アメリカは新興の国である。文化伝統
などというものはヨーロッパに比べた
ら無いに等しい。アメリカの小説家
はつねに「素晴らしいアメリカ小説」
（あるいは「偉大なるアメリカ小説」
というべきか）を夢想していた。すで
にあるGreat American Novel、ヘミ
ングウェイ、フォークナー、ホーソー
ン、メルヴィル、etc.によって書かれ
た小説もあれば、これから書かるべき
小説、つまり自分が書く小説も。そこ
で、ロスのこの小説だ。
「スミティと読んでくれ」と、この小
説は始まる。ここに注がついた。Call
me Smittyは『白鯨』の出だしの Call
me Ishmaelを踏まえたのだと。『白

鯨』はまさに Great American Novel
だ。しかも Ishmael は旧約聖書に登場
するイシユマエルに由来する。

そこで『白鯨』を開いてみれば、
「ナサニエル・ホーソーンに」という
献辞が目飛びこむではないか。「素
晴らしいアメリカ野球」には「これは
タフな姐ちゃんたちのことを書く本で
はない。ナット・ホーソーンはその昔
そういう本を書いた」という箇所があ
る。これだけでも吹き出しそうにな
るのに、「ヘスター・プリンはたしか
に「タフな姐ちゃん」と言える精神的
な強さを備えている」という注をつけ
た。今回の柴田元幸による注により、
本文のおもしろさがじつに生き生きと
伝わってきた。

よけいなことだが、研究もかくあり
たいものである。

支部大会案内

二〇一七年度 秋季大会 於・近畿大学東大阪キャンパス

十一月十一日（土） 午後一時三〇分～

【プログラム】

■開会の辞

近畿大学文芸学部教授

佐藤 秀明

■閉会の辞

吉田 大輔

■研究発表

明治三五年の東本願寺紛擾——遠因としての成島柳北——

天野 勝重

永井荷風『花瓶』論——「花瓶」の象徴性をめぐって——

アブラル・バスイル

江戸川乱歩「屋根裏の散歩者」完成の地の今昔

宮本 和歌子

幸田露伴「幻談」における固着、切断、創意工夫をめぐって

支部長 浅子 逸男

〔自由発表要旨〕

明治三五年の東本願寺紛擾——
遠因としての成島柳北——

天野 勝重

成島柳北は明治四年に現如上人が東本願寺浅草別院に設置した真宗東派学塾の塾長として迎えられ、これがきっかけで翌年の上人たちの欧米への漫遊に柳北も随行することになる。その時の記録が『航西日乗』（「花月新誌」一八八一年〜一八八四年）であるが、柳北以外の随行者の一人として、石川舜台という名が散見される。舜台の名は『海外見聞集』（岩波書店、二〇〇九年六月）巻末の『「航西日乗」人名注・索引』によれば本文中に一七回登場しており、「本山の重職を歴任し、制度改革や人材育成、また海外布教などに尽力した」と注記されている。吉川弘文館『国史大辞典』や『真宗人名辞典』（法蔵館、一九九九年七月）と

いった辞典類も、この内容と大きな違いはない。実際彼の人脈によって大谷派は韓国進出を他宗派より早く行うことが可能になったと考えられるし、そこが彼を評価する上での基軸とする見方が大勢である。

しかし、実は舜台と現如は、明治三五年に非常に大きな、宗門を巻き込んだスキャンダルを起こし、『読売新聞』に約一ヶ月に及び記事を掲載されることになる。このことから、決して辞典に書かれていることだけが全てではないことが浮かび上がってくる。

本発表では、そうしたスキャンダルが発生するに至った背景とその原因を「読売新聞」の記事を中心に考察するとともに、彼等の行動原理の形成に、柳北との洋行があった可能性について考える。

永井荷風『花瓶』論——「花瓶」の象徴性をめぐって——

アブラル・バスイル

永井荷風『花瓶』（「三田文学」大正五年一・二月）では、政吉夫婦にとつて記念の品だった「花瓶」の絵を、家庭の不和に悩む友人で画家の燕雨が描くに至る過程を中心に、両夫妻の有様が語られている。従来、絵の完成は「腕くらべ」の出現を示唆するもの（吉田精一『永井荷風』八雲書店、昭和二二年）であるほか、「芸術の勝利」（坂上博一『永井荷風論考』おうふう、平成二二年）も象徴しているとも解釈されてきた。

本発表では、小説の構成の分析を通じて、登場人物たちの内面と相互の関係を再考し、作中の「花瓶」が象徴するものを明らかにしたい。物語の前半では、お房と政吉の過去が現在と交錯したかたちで語られる。そこで過去の出来事を時間軸に沿って整理してみる

と、二人の結婚は政吉が会社を辞めた事情と前後して起きたのだという事実が判明する。この事実はお房と政吉の「花瓶」に対する思いの正体を現す一方で、燕雨がいう「己が家の住憂ひ事と政吉の家の平和幸福な事」やそれ故に創作される「花瓶」の絵について再考することを可能にする。

このような考察を通じて「花瓶」が各々の人物が追求する〈幸福〉の正体を象徴的に表していることが明らかになるはずである。また、芸術に対する燕雨と政吉の心理の分析は、同時期の荷風小説にたびたび描かれる芸術志向の意義を捉え直すことにつながるだろう。

江戸川乱歩「屋根裏の散歩者」 完成の地の今昔

宮本 和歌子

雑誌『新青年』大正一四年八月号に発表された江戸川乱歩の短篇小説「屋根裏の散歩者」は、しばしば彼の代表作の一つに数えられる有名な作品である。乱歩はこの作品の前半部分を、当時居住していた現在の大阪府守口市の借家で書いたことを複数の随筆などに書き残している。後半部分を書き完成させた場所については、乱歩の実父が宗教的な病氣治療のために参籠していた「三重の山奥」としか記しておらず、その具体的な地名は長く不明であったが、「屋根裏の散歩者」を完成させた場所が三重県亀山市関町にある岩屋観音という小さな寺であることが判明した。

岩屋観音は江戸時代には多くの参拝者で賑わい、葛飾北斎や歌川広重の浮世絵も残っているが、東海道を旅行す

る客の減少に伴い荒廃し忘れられた地となっていた。従って乱歩が訪れた大正時代以降の様子は史料にはほとんど残っておらず、乱歩が「屋根裏の散歩者」を完成させた場所について机上でのみ特定しようとすることは不可能に近かった。目星をつけた場所が高齢の地元住民への聞き取りを行った結果、乱歩実父の参籠地が岩屋観音であることだけでなく乱歩の実父に病氣治療を施していた人物の氏名や生没年も判明した。その人物が亡くなって七〇年以上経過した現在でも現地には彼の信奉者があり、独自の信仰形態を形成している。今回の発表では、史料にはほとんど残っていない大正時代から現在までの岩屋観音の実態を中心に報告する。

幸田露伴「幻談」における固着、
切斷、創意工夫をめぐって

吉田 大輔

幸田露伴（一八六七—一九四七）の「幻談」（『日本評論』一九三八・九月）をめぐる先行研究はすでに一定の蓄積があるが、これまであまり検討されてこなかった論点を本発表ではふたつ挙げ、この作品を再検討したい。

一点目は、「幻談」前半部のウインパー『アルプス登攀記』を典拠とする再話と、「幻談」後半部に語られる船上での出来事（これも再話の形をとる）は、主題の近接のみではなく、細部の類縁性によっても接続されているのではないか、という点である。このふたつの話をめぐって、これまでの議論では、死、あるいは死者との遭遇があったのちになんらかの「幻」を見るという主題的近接が主に強調されてきた。だが、それに加えて、なんらかのひも状のもの（ロープ、釣糸）が固着

し、ふいに切斷される、という細部の類縁性によっても接続されている点を再考したい。

二点目は、「幻談」後半部と、類話との差異である。「幻談」後半部の類話の存在は、すでに指摘されている。だが、それらの類話と「幻談」後半部の差異から見えてくるものは、これまであまり議論されてこなかった。本発表では、類話との大きな差異のひとつを、後半部において重要な役割を果たす「釣竿」や「釣糸」がいずれも金銭によって購われたものではなく、水死者自身の創意工夫が結実した事物として登場する点にあると捉え、露伴が人間の創造をどのように捉えていたかという観点から、その意義を考察したい。

支部大会報告 二〇一七年度 春季大会

六月三日（土） 於・同志社大学今出川キャンパス

■大会発表を終えて

〔自由発表〕

発表を終えて

岩本 知恵

今回の発表では安部公房「赤い繭」を取り上げ、変形の問題を比喩としてではなく、身体認識の変容として捉えるという観点から読解を試みた。考察の末、本発表が至ったのは、言説化された身体がそのためにはらむ身体のままならなさである。身体が法に従う限りにおいて陥ってゆく極限の身体性は、「赤い繭」では特に疲れとして描写されている。そして身体はそのままならなさを足掛かりに身体認識を問

直す契機を得る。自由にならない身体は、身体の所有に疑義を呈することに
なる。身体が自己のものではないこと、しかし自己は身体を足掛かりに存在していること、その両義的な感覚が、身体自体を、自己である／ないという境界産出自体の問い直しへと向かわせるのである。

発表を終えて振り返ってみれば、しかし、こうした流動的な身体認識をどのように評価すればいいのかという問題が新たに出てきたように感じる。今回の発表では心身二元論的な価値観から脱却しつつ、また身体を本質化しない読解を目指してきた。しかし昨今では、「流動的な身体」「流動的なアイデンティティ」という言葉自体が本質化したり、安易な自由を連想させる文脈

で使用されたりすることもあるという印象を受ける。あくまで今回考察した身体認識の変容は、自由にならない身体に端を発するものである。安易な自由という文脈からは距離を置いたものとして捉えたい。発表では「おれの家」と「帰ってゆくおれ」の図式から逃れた」と表記したが、こうした図式からは逃れられても、身体認識が変容した後もおそらく「おれ」は決して自由ではない。それ故、「おれ」の変形は完遂されることなく、「おれ」の身体認識は「流動的」であり続けなければならぬのである。

そう考えると、発表で読解し切れなかった最終部は、安易な自由や解放としての読解を止揚するような場面として解釈できるかも知れない。変形した繭は「彼」に拾われておもちゃ箱に入れられる。身体認識の変容と流動性は決して安直な解放や自由と結びつくのではなく、認識の裂け目やずれであり、更なる解釈と思考を要するものである。安易な自由や解放という文脈

から距離を置きつつ、「流動的な身体」をどのように評価し思考すればいいのか、今後とも研究を進めたい。

最後に、このような発表の機会を与えてくださった関係者の皆さま、そして会場の内外でご意見をくださった皆さまに厚く御礼申し上げます。

発表を振り返って

藤原 崇雅

日々学んでいる大学で発表させて頂けるという、得がたい機会を与えて下さった運営関係者の方々、発表中および質疑の際に絶好の雰囲気をつくって下さった司会のお二人の先生方、そして何より御足労下さった聴衆のみなさまに心より感謝申し上げます。当日は会場がほぼ満員になるほどの盛況で、そのため極度の緊張に陥りましたが、結果的に多くのご意見を頂戴することができ幸いであった。また、会場校であるにも関わらず、発表を楯に準備を

手伝わす負担を強い同級生と後輩にも、場違いながらここでお詫びしたい。

今回の発表は、武田泰淳『風媒花』におけるJ・P・サルトル『自由への道』の影響の精査を通じ、戦後におけるその受容の一端を明らかにする試みであった。近年、日本近代文学におけるサルトル受容の研究は活況で、学術誌にはその名前が踊る。私が、この活況に乗っかうとしたことは隠すべくもないが、しかし発表に価値があるとすれば、泰淳のサルトル読解が、物語言説と物語内容の分量によって設定される叙述の速度をはじめとした、創作の技法レベルに特化して行われた点に気づけたことではなかったかと思う。

賜ったご意見のうち、ふたつにお答えしたい。ひとつめは、本作と映画の関係を問うものである。作品における複数の人物の行動が並列して書かれていく箇所は、さながらカメラが切り替わるようだし、『風媒花』が映画的であるという指摘自体は、先行論にも数

多くあったのだが、本発表では触れないでしまっていた。サルトルの時点ですでに映画的手法が小説に適用されており、その手法を受容した泰淳の作品も映画に近いものになった、そして同時代に話題となっていたイタリヤ映画の動向などと『風媒花』が共振した、という道筋が想定されるので、これからそれを跡付ける作業を行いたい。

ふたつめは、性の問題が作品で取り扱われていることが、考察から抜け落ちていくという指摘である。この指摘は正鵠を射たもので、最大の読みどころを切り詰めてしまった力不足が嘆かわしい。現実の時間に物語内の時間を近づける叙法によって本作が描いたのは、新中国成立直後の時代である。質疑の際、動揺してうまく答えられなかったが、今振り返ると、その時代背景が東京に生きる登場人物たちに関わってくる際、直接的な政治活動だけでなく、性をめぐる日常の次元と接続され得ること、そのような経路が作品

内に示されていることに思い至った。この場を借りて改めてお応えしておく。

これら貴重なご批判を無駄にしないために、今後は本発表を活字化できるように努力していきたい。本当にありがとうございます。

〔小特集・連続企画第四回〕
「視差から立ち上がるもの」

途中下車したくないの記

大橋 毅彦

連続企画「《異》なる関西」が始まって以来、いわゆる「お国自慢」に滑り込まない形で、関西の文芸文化の持つ潜在的エネルギーの発見に努めることが重要だと考えてきた。

ただ、それをどういう方途で実現するか？ 無名にも近い対象を取り上げて、その存在を知らしめ、その再評価に赴くことも当然為されてしかるべきだ。少し前では季村敏夫の仕事、そしてつい最近では高橋輝次の『編集者の生きた空間 東京・神戸の文芸史探検』がそのことを示している。だが、支部の大会といった、ある意味では一発勝負の場で、そうしたスタンスをとることはどこまで有効に働くだらうか。一つの事実もしくは対象に密着しすぎるだけでは、それについての知識

の多寡において一日の長のある報告者と、それを聞かされる者との間に議論を交わしあいたいという情動が生じてきにくからう。

その意味で、企画委員の方から提示された「視差から立ち上がるもの」というテーマ、「そもそも『《異》なる関西』とは、なんらかの実体としてあるのではなく、さまざまな当事者の「視差」を通して立ち上がってくるのではないか」といった研究と討議の方向性は、私の意欲を掻き立ててくれた。

フリーデイスカッションの場において、自分以外のお二方の発表に反応、『同胞』と「おほざら」の創刊がともに一九二四年三月であること、「神戸画廊」の立つ鯉川筋が、沖繩から大阪に流着した人々の存在があるように、神戸港からブラジルへ移動していく人たちの通り道でもあったこと、また、その土地の「再現」ではなく「解釈」に向かった直木三十五の大阪表象を問題にするなら、小野十三郎の「大阪」Ⅱ「《葦》の地方」だつてあるこ

とを述べ立てたのは、さらなる視差の存在に言及しようとしたためであり、

ひるがえって私自身が行った報告の主題も、その中において自分が照明をあて、一旦は一つの見取り図を提出したものが、次の瞬間には異なった図像に反転することを示すことになった。つまり、小田実「河」の登場人物たちが口にするアイルランド・イメーじや、「アヘン」都市・神戸と上海」という問題系が、「おほぞら」や関西学院文学山脈の系譜や「神戸画廊」を入り口として見えていた風景（そこにも二〇年代神戸と三〇年代神戸の文化空間を走る力線の相違が認められるわけだが）を、どのように描き直させ、次なる風景につなげていくかを問うことに力点を置いたつもり、ために各項目に關しての注釈的解説をすることは初手から断念しての発表となったけれど、モダンと伝統の共存なら酒井嘉七、神戸・上海が戦後に落ち合う大阪朝日会館での「グランド・バレエ・アメリカ」のことなど、話したかったことは

まだまだあつて終わった気がしないのです。

発表を終えて（二人の五代友厚――

直木三十五の「大阪回帰」をめぐって――）

尾崎 名津子

直木三十五『五代友厚――大阪物語続編――』（以下『五代友厚』）を、織田作之助が五代を描いたテクストと比較検討することで、直木の〈考証〉という創作手法が仄見えた気がしてはいるが、直木と大阪とをいかに結ぶか決めかねている。少なくとも、ノスタルジックな〈故郷・大阪〉の仮構という文脈が、そこにはなかった。今後は、〈大阪もの〉の系譜において、『五代友厚』以降の直木が〈考証〉のスタイルを捨てたことの意味を問うべきだろうか。

大橋先生、富山先生のご発表を拝聴し、議論に参加して印象を新たにしたい。

点を二つ挙げたい。「近世との接続」と、「関東大震災と資本主義社会の展開」である。これらが関西の文芸文化を考える際に必要ではないだろうか。

まず、大橋先生が示された、竹中郁の川西英評に接し、直木の講談本受容や、織田の文楽への拘りが思い起こされた。関西における「モダンなもの」には、パランプセストとしての「近世的なもの」が常に漂っている、と書く。と、乱暴に過ぎるだろうか。とはいえ、上方講談や駸々堂を挙げるまでもなく、関西の文化資本のありようは、関東（東京）のそれとは確かに異なり、関東よりもはるかに近世と地続きだったのではないか。また、その担い手を考えると、全国各地の出身者の寄り合いとして成立する〈中央文壇〉と、関西出身者が中心となっていた関西の文芸文化とは、その〈場〉の質が異なる。そこに留意することで見えることもあると思われる。

資本主義社会の展開が文芸文化の前提にあることは、一般論としても言え

る。今回、富山先生からあった関東大

震災に関する指摘を、そのこととの関わりで重く受け止めた。それは関西にとつて対岸の火事ではなく、むしろ資本主義社会の展開と相俟って、都市の内実に変更を求める出来事だったという視角は重要である。その都市の内実には文化のありようも含まれる。震災によつて「関西」はむしろ一定の完成を見たのかもしれない。織田作之助『夫婦善哉』において、関東大震災によつて「東京に行けなくされた」蝶子と柳吉の姿が改めて想起されたのだが、ここではそのことを付記するにとどめたい。

この度の貴重な機会を与えてくださった企画ワーキンググループの皆様に、心より感謝申し上げます。企画の狙いから見て私の発表が視差の一つとなりえたかどうか、とても心許ないが、当日に頂戴したさまざまな視差を、一つずつ丁寧に検討していきたい。

発表を終えて

富山 一郎

当日会場で自分の順番を待ちながら、田口律男さんの趣旨説明、大橋毅彦さん、尾崎名津子さんの報告を聞いていると、新たに話したいことが次第に降り積もつていき、いざ自分の報告になると、結果的に時間が足りなくなつてしまった。このような言葉の増殖は、性急に一つの答えを出すことではなく、「視差から立ち上がること」に軸をおいた今回の企画設定の心地よさにまずは起因しているのであり、また何よりも、自らの場所を作り上げようとする一人一人の営みから神戸という場所を見事に浮かび上がらせた大橋さんの報告や、人物伝と歴史考証、仮構と実体の間に、直木三十五が要請した同時代の大阪を描き出した、尾崎さんの迫力ある報告により、触発されたからだ。またそこには、議論が共有できることへの喜びもあった。その喜びは、研究分野やテーマが共通している

ということだけでは、到底いいあらわすことが出来ない、ある種の横断性にかかわる感動だ。

共有できたと私が感じたのは、自分たちを名乗るといふことだ。それは近代小説における「私」ということは少し違う。ある場所にかかわる多様なベクトルを持つ様々な記述が、絡まりあいながら結果していく集合性のようなものであり、文字通りそれが「視差から立ち上がるもの」なのかもしれない。「私」ではなく、どのようにして「私たち」という主語において言葉を記すことになるのだろうか。その時の「私たち」とは誰なのか。私が自分の報告で、「宣言」という言い方に込めたのも、こうした問題だった。またここでは、神島二郎が「第二のムラ」や郷友会に収まらない「過去を語らない人々」と述べた人々、すなわち名士や立身出世を軸に語られる「私たち」においては排除されてしまう人々が生み出す共同体の可能性を、どのように見出すのかということが重要だった。大

阪の沖繩にこの可能性を見出そうとしたのである。これは、報告で言い忘れた点である。

報告を終わって以降、いくつか気づいたことがある。一九五〇年代の生活記録運動をふりかえって鶴見和子が、書くという時間が保証されてない人々にとつて、とぎれとぎれで生じる思いや出来事を最も素早く言葉にする形式として詩や俳句や和歌があるという指摘しているのを読んで、なるほどと思った。こうした点から、『同胞』にある詩や俳句について再度考えたい。また同じく鶴見によれば、自らの生活を、主語を省かずに書くということが、生活記録運動の大きな要点だったという（鶴見和子『生活記録運動のなかで』未來社、一九六三年）。経験を我がものとするのが、あらかじめ定義された等質な所属集団の試みではなく、様々な場所で同時多発的に展開していく記述の結果として生じる多焦点的な活動だということ。ここにも「視差から立ち上がる」という設定の面白

さがあるに違いないと考えている。

■大会印象記

自由発表

福田 涼

岩本知恵氏「安部公房「赤い繭」——変形する皮膚、変形する身体認識——」は、境界としての皮膚が自己にとつて内部でありかつ外部でもあるという両義性を備えていることを踏まえつつ、「赤い繭」における主人公の変形について詳細な考察を施した。まず同時代コンテクストを参照しつつ、浮浪者としての「おれ」が共同体の内部に周縁化されて存在していること、そして「おれ」が無意識に法を内面化し、働き続ける身体として馴致されていることが論じられた。その上で、法に従い身体を役務することがもたらす疲れが身体の繭への変形、すなわち皮膚という自己存在の境界の曖昧化を惹起したことが述べられ、最終的に「おれ」が「おれの家」と「帰ってゆくおれ」の図式から逃れていることが指摘

された。

会場からは、今回の考察がどのような文脈に接続可能であるのか、という問いが発せられたほか、小説末尾の解釈に関する質問が挙がった。後者について少しく私見を述べれば、この度の発表が、皮膚の変形に伴う身体認識の変化について分析するものとしてあつた以上、斯様な変化が生じた後に為される「おれ」の語りの位相と構造に関して、より踏み込んだ分析が必要なのではないかと思われた。

藤原崇雅氏「武田泰淳とJ・P・サルトル——『風媒花』における『自由への道』の影響をめぐって——」は、泰淳の『風媒花』が、等速的なテンポを保ちつつ小説世界を叙述する方法や、多数の登場人物に焦点化を行うことで並走する各々の個人的時間が相対化されるプロットの構成をサルトル小説から摂取していることを、ナラトロジーを援用しつつ明らかにした。また作中人物の日常を圍繞する歴史的情勢の換骨奪胎を通して、戦後日本に生き

る主体が東アジア情勢と無縁でないことが表されている旨が指摘され、如上の方法意識を実践に移し得た泰淳の小説家としての位置が、同じくサルトルに影響されつつ『邂逅』を著した椎名麟三との対比や戦後のリアリズムに関する議論への参照を介して定位された。

質疑では、作中で言及される同時代の諸事象との関係や、映画におけるモントージュの手法の影響などについて議論がなされた。今後の展望に関して、発表者からは現実のスピードを呈示する手法（G・ジュネットのいわゆる情景法）としての「会話」への着目が戯曲『ひかりごけ』にも引き継がれていったのではないかとの見解が提示されたが、泰淳が「戦後、小説の形式で、絶えずくわだててきた」という「人間世界を全体的にとらえようとする試み」（『司馬遷』序文、文藝春秋新社、一九五九年三月）という観点から、今回の考察や『風媒花』という小説それ自体を意義づけなおすことも可

能なのではないだろうか。

ところで、今回の春季大会について、自由発表から連続企画までを通して学生の発言が多く聞かれたことは、同じ一人の学生として心強く感じられた。秋季大会が楽しみに待たれるところである。

小特集

丸山 倫世

連続企画「《異》なる関西」最終回となる第四回は、「視差から立ち上がるもの」というテーマのもとに三氏の発表が行われた。

大橋毅彦氏は、「大阪朝日新聞」神戸支局員の活動と、鯉川筋に開設された「神戸画廊」をめぐる動向を主軸として、一九二〇・三〇年代の神戸には多様な文化空間がきわめて重層的に展開していたことを明らかにした。豊かな資料について実証的検討を行った上で、この文化の当事者たちの想像力の

埒外にある世界の存在を、フィクションを用いて指摘することを忘れなかった大橋氏の縦横無尽な発表は、非常に魅力的であった。

尾崎名津子氏の発表は、直木三五の長篇小説「五代友厚」をめぐって、直木の方法論を検討し、大阪との関係を考察したものである。尾崎氏が《史》への意志と呼ぶ直木のスタイルは、資料と想像力を用いて出来事の因果関係を解釈し、もつともらしさを持たせるといふ方法である。こうした直木の《史》への意志によって「五代友厚」では大阪や大阪人なるものが仮構されているという指摘は興味深く感じられ、今後の研究にも期待が膨らむ。

富山一郎氏がフォーカスするのは、経済的困難から大阪に移住した沖縄県出身者と、彼らが結成した関西沖縄県人会の機関紙「同胞」である。富山氏は「同胞」に掲載された多様な記事を検討し、これを沖縄県出身者が自己の場所や歴史を獲得する行為の痕跡として読んだ。これによって、沖縄県

人が個人的な感情、日常的な経験をパフォーミングに表し、これを集合的に共有するための装置としての機能を同紙が果たしていることが明らかになった。このアプローチは連続企画全体に対してもきわめて示唆的であったようだ。

各発表を受け、全体討議では、連続企画を通してどのような《異》なる関西の姿を看取することができるかが最大の課題となり、白熱した質疑応答がかわされた。質疑にもあがったとおり、各発表には一見して明瞭な結節点が見出しづらいという印象があった。もちろん、いずれの問題にも大きな枠組みとして、世界規模で隆盛する資本主義やモダンイズムが通底しているのは間違いないが、すべてがこれに還元できるわけではない。こうした大きな枠組みに加えて、我われが意識的に目を向けるべきは、そこに住まう階層や出自の異なる多様な人びとの、主体構築のために行為遂行的に行われる生の営みと、その表出としての文芸文化で

あるように思われる。とするならば、その諸相が混沌の様相を呈するのはごく自然なことで、一枚の俯瞰図を作成するには捨象せざるをえないものが多すぎる。それならばむしろ、人びとが交錯しせめぎあう一九二〇・三〇年代の関西の多様な文芸文化の間をくり返し往復することによって、一様ではない《異》なる関西が幾重にも立ち上がってくる可能性を期待したい。今回はその片影をうかがうことができたのではないだろうか。

坂井 健著

『没理想論争とその影響』

野村 幸一郎

本書は明治二四年から二五年まで坪内逍遙と森鷗外との間に交わされた没理想論争を主なテーマとした論文集である。本書はこの論争を同時代の文学や思想、宗教などさまざまな文化領域の結節点としてあつかい、論争そのものの本質を解明すると同時に、明治期における思想や批評の多様性やそのレヴェルの高さを可視化することに成功している。私たちは、本書を一読するとき、現在に劣らない、あるいは現在以上に豊饒な言説空間が、明治二〇年代の論壇や文壇に広がっていたことに驚くことになる。

本書の眼目となるのは、第一部、第二部であろう。ここで筆者は没理想論争における、逍遙と鷗外の哲学的な立場の違い、あるいは認識論的布置の差

異を浮き彫りにしている。最終的に筆者は、この論争は「一元論的認識論に立った鷗外が」、二葉亭四迷の影響の下「二元論的直観論に立っていた逍遙を攻撃していた」とまとめているわけだが、このような理解は、たとえば、「写実派逍遙と観念美学派鷗外とがぶつかるべくしてぶつかった」（磯貝英夫）というようなオースドックスな理解とは真逆の像をむすぶものとなっている。もちろん、筆者の論証の手続きはきわめて周到であり、文学史上の常識を覆していく手腕は見事としか言えないようがないのだが、それを認めた上で、なお私は、鷗外は一元論、逍遙は二元論というような、明確な図式化に對して、やや違和感を感じた。たとえば、鷗外が独逸三部作を記し、『即興

詩人』を記した事実を踏まえたとき、私たちは鷗外の精神が内包する輻輳性や多面性を意識せざるをえない。とするならば、たとえ、少々歯切れが悪くなっても、多面体として、あるいは、振幅としてあるような鷗外の内面を含蓄するような言い方を工夫してもよかつたのではないか、という感覚が残った。

いずれにせよ、一九世紀末の西洋における思想状況や宗教上の潮流などを踏まえつつ、比較文化論的視点から没理想主義論争について分析を展開している本書は、世界的視野に立って、この論争を位置づけ、その意義を明らかにすることに成功している。本書が鷗外研究のみならず逍遙や四迷の研究にあっても、画期的な一冊になっていることはまちがいない。

(二〇一六年二月二十四日 思文閣出版 三五七頁 八九〇〇円＋税)

中村 三春編

『映画と文学 交響する想像力』

木谷 真紀子

本書は、編者・中村三春の「日本における映画と文学」に始まり、三部で構成され、さらに四本のコラムが収められている。

「Iジャンルとメディアの形成」では、その粹物語の構造に「日本の文学者」が「先を越された」と感じた『カリガリ博士』の影響を夢野久作『ドグラ・マグラ』を中心に論じた、佐藤泉「カリガリからドグラ・マグラへ」を皮切りに、年を追って「文芸映画及び映画と文学との相関の枠組みにおいてジャンルがどのように形成されメディアとしての機能を身に帯びるに至ったかを追究する」。

「II協働とメディア・ミックス」の横濱雄二「探偵とノスタルジアの視線——『獄門島』をめぐる』では、市川

崑が「獄門島」を含む一連の作品で四季を描き分け、新聞やテレビを通して拡大された国鉄の広告「デイスカパー・ジャパン」を強く意識していたこと、国民がノスタルジアを掻き立てられる故郷を、映画と言う虚構の中で作り出していたことを指摘した。

「III川端康成の小説と映画」は、二〇一四年にパリで行われた「ワークショップにおける報告内容」である。志村三代子「ふたつの『千羽鶴』——映画の宿命に抗して」では、制作が十六年隔たりながら、両作ともに新藤兼人が脚本を手掛けた二作の映画『千羽鶴』を、「原作の持つ豊饒な世界を無限に拡張させてゆく合わせ鏡のような役割を果たしている」とまとめる。

文学を原作とした映画に、「原作に

忠実」であることが求められることは少なくなく、原作にはない要素の注入は、とかく批判の対象となりやすい。だがアニメーション映画の制作者たちが、生活のために絵本や雑誌などの他ジャンルを往來していたこと（萩原由加里）は、「サブカルチャー」に対する「カルチャー」の優位性の否定と理解することもできる。つまり本書は、副題「交響する想像力」が示すように、「映画と文学」のみならず映画と他のカルチャーとの関わりを、双方向から確認しているのだ。紙幅の関係で殆ど触れることができなかったが、映画から原作を読み解こうとした全ての論考に示唆を与えられた。さらに「物語の欲望の装置である映画と文学は各々に独立している」（中川成美）という視点があれば、一九五、六〇年代のように文学作品を原作とする優れた映画作品が輩出されるのではないか、という期待をも抱かされている。

（二〇一六年三月二四日、森話社、

三三三頁、三四〇〇円＋税）

橋本 正志著

『中島敦の〈南洋行〉に関する研究』

渡邊 ルリ

本書は、晩年の中島の歴史・人間認識への影響を指摘されてきた〈南洋行〉の意味を、南洋庁内務部地方課勤務、国語教科書編修書記という中島の立場と時代状況の調査を踏まえ、「文学」と「日本語教育」の二つの視座を主たる軸として論じ、南洋関連作品に新たな解釈を与えたものである。

著者は、中島の書簡に登場する南洋庁地方課長を『南洋』の異動記事と『南洋庁職員録』により特定し、中島を編修書記に斡旋した友人の釘本久春と共に、その思想的立場を検証して、中島が関わった編修作業の方向性を慎重に踏み分ける。このような細部から島民教育政策方針とその構造的課題に至るまでの、厳密な考証によって、当時「編修書記」が外地への日本語普及

政策推進を目的として組織編制と理論構築を実践したことを指摘し、そこに中島の教科書編纂を位置づけ、さらには編修の仕事を退く中島の決意と晩年の時代認識を導くのである。

従来作品の背景として扱われがちであった中島の日記・書簡本文の事実関係を、著者は調査解明し、小説・漢詩・和歌の作品解釈においても精密な考証から、執筆当時の社会認識や風潮を浮び上らせる。『鶏』の背景にある「統治国の宗教的・社会的価値観」が流入・融合した「パラオ社会の実相」、『マリヤン』の植民地パラオの言語社会への視座など、〈南洋もの〉に反映した中島の歴史認識を抽出した意味は大きい。この姿勢は『山月記』論でも貫かれ、官僚文人という視点によって

李徴の挫折と袁修の認識を新たに照射している。一方、「小笠原紀行」に登場する少年の家系を明らかにし、選び取られた風景と歴史を意味づけた上で、現実の異文化世界へ歩み入る中島の心に迫る解釈は、著者の父島での現地調査によって活きている。さらに望むならば、本書の「軸」の一つ、「北」から〈南〉への展開」に、「光と風と夢」のステイヴンソンに投影された南洋がどう組み込まれるのか、著者ならではの論証を待ちたい。

本書は、阿部知二や石川達三の南洋関連作品研究その他と、浙江省の大学で日本語教育に従事した著者の「日本語を学ぶこと」の意味——〈対話〉へ向かう中国入学生のことば——を収録する。人を根底から変える異文化体験に対する著書自身の眼差し、対話による相互認識の深化への情熱が、論述の奥底から伝わる研究書である。

(二〇一六年九月二二日 おうふう

三八四頁 六八〇〇円＋税)

坂 堅太著

『安部公房と「日本」』

——植民地／占領経験とナシヨナリズム——』

岩本 知恵

本書でなされているのは、安部とナシヨナリズムとの関係性の問い直しを基盤に、一九五〇年代の安部の作品や発言を再評価し位置づける試みである。安部に付随する「無国籍性」というイメージが一九六〇年代以降の作品のみを基盤にし、一九五〇年代の作品が半ば無視されていることを問題として提示。作家神話の解体を目指している。

本書が提示する論点は多々あるが、特筆すべきは「国境病」型ナシヨナリズム」という概念の提示であろう。「国境病」型ナシヨナリズム」とは、従来のもとは違い、「同質性ではなく差異に基いて立ち上げられる」ものである。しかもその差異を認識するためには、「具体的他者」が必要である

とされる。要するに、「国境」に代表される何らかの境界の産出（とアイデンティティの産出）には常に、異質な「具体的他者」の認知が必要なのだ。この概念において重要なのは、具体的他者の存在によって認識の変容を孕むということであろう。この「ナシヨナリズム」は最早固定的なものではない。「国境病」型ナシヨナリズム」によって安部は、発展的創造の契機とする姿勢を獲得したのだ。

こうして最終的に本書は、一九五〇年代安部のナシヨナリズム観を明らかにするのみならず、一九六〇年代以降の安部のナシヨナリズム批判が「共同体」批判ではなく、「同質性を基盤とするナシヨナリズム」の構造問題を批判しているのだということ指摘する

に至っている。

さて、ここで浮かぶのが「国境病」型ナシヨナリズム」をあえて「ナシヨナリズム」と呼ぶ必要があるのか、という疑問であろう。差異に基づくが故に流動的なアイデンティティを、ナシヨナルな枠組みであらかじめ固定することにやはりほしくないか。

予想するに、ここであえて著者が「ナシヨナリズム」という言葉に踏みとどまったのは、「日本国民」の加害責任の問題を矮小化しないためだろう。論点の一つでもある「日本国民」の加害性の問題は、容易に、「日本国民」の責任に逃れられるものではないという意識がこの言葉選びからは見て取れる。「無国籍性」を自由や解放の文脈で考えなかった著者に敬意を払いたい。ただ、問題は継続している。決して一様ではない加害と被害の問題を、どのように考えればいいのか。安部のその後の思索について、続論が期待される。

（二〇一六年一月二〇日 和泉書院 二二三頁 三三〇〇円＋税）

森下 達著

『怪獣から読む戦後ポピュラー・カルチャー・特撮映画・SFジャンル形成史』

友田 義行

マンガやアニメに代表されるポピュラー・カルチャー（以下PC）は、キャラクターを中心として作品が受容され、しかもそうした受容が非政治的な行為として理解される傾向がある。しかし、PCのこうした受容のあり方は果たして当然のものなのか、むしろ現代日本における特殊な事態なのではないか。

本書は、広大なPC領域の中でも特殊技術撮影が駆使された映画ジャンルに焦点を当て、かつては政治的・社会的議論の対象でもあったPCが、どのようにして非政治的な領域に変容していったかを、歴史的な観点から明らかにしている。特に『ゴジラ』をめぐる評価観点が時代を追って変化し、しかも過去の評価を現在の視点から修正

（改竄）しながら展開していく様相からは、作品評価にまつわる自明性を疑うことの大切さと難しさを改めて教えられた。

興味深いのは、膨大な同時代評を渉猟しつつPC領域から政治性が脱色されていく経緯が丁寧に辿られているだけでなく、そうした過程に文学者も深く関与していたことが重視されている点である。原爆文学やアヴァンギャルド芸術、SFから未来学、そして軽薄なドタバタへの流れの中で、創作者と批評家、そして読者や観客が求めたアクチュアリティの変遷が分析されている。

如上の論考に触れながら、本書でも言及のある安部公房の小説『他人の顔』（一九六二年）をめぐる受容の

歴史を想起させられた。事故で顔面にケロイドを負った男が、他人の顔を借りて妻を誘惑するこの物語の終盤には、原爆被害と思われるケロイドを負った女性の挿話が描かれる。一九六四年に映画化された際、この挿話は拡大され、「仮面の男」と「被爆者の娘」という二つの独立した作品が交錯するかなような構成に変えられた。実は、一九九〇年代に『他人の顔』は、「怪奇映画特集」にラインナップされたことがある。原爆という現実の社会的事象から切断されたとき、ケロイドや包帯姿はミイラ男を思わせる特殊メイクに焦点化してジャンル配置されたのだった。同じ頃、アメリカやフランスの観客が、この映画と原作を原爆表象の問題から捉え返していったことと対照的であった。公開当時の映画評にも「原爆乙女」の表象をめぐる論が確認できるのだが、こうした事象を考察するためにも極めて有益な一冊であった。

（二〇一六年一〇月三二日 青弓社
二八六頁 三〇〇〇円＋税）

杉岡 歩美著

『中島敦と〈南洋〉』

同時代〈南洋〉表象とテキスト生成過程から』

大東 和重

文学を研究する動機の一つに、なぜ自分はこの作家が好きなのか明らかにしたい、という欲求があるだろう。作品分析や伝記研究、時代論など種々の方法の中で、杉岡氏が用いたのは、中島敦が読んだ〈南洋〉と関わる作品との比較と、草稿などから創作の手順をたどる手法である。見えてくるのは、〈南洋もの〉における中島文学の特異性であり、独自の文体の効果がいかにもたらされたのかである。

戦前の〈南洋〉に対しては、日本の植民地・軍事拠点のイメージ以外に、〈未開〉の活力や癒しを求める南洋幻想があった。中島の読んだ大久保康雄の南洋ものを特定し、両者を比較して、南洋幻想そのままの大久保に対し、〈文明人〉としての自己認識に至

る中島を論じるあたり、本書の面目躍如である。またビエール・ロティと比較する章では、草稿分析を組み込んで、漢語を用いる効果や意味を問い、古めかしさと鋭さの同居した中島の文体論となっている。

〈南洋〉に幻想を抱いて出かけた点で、中島敦は時代の空気を共有していた。しかし偏屈な中島は、日本の統治だけでなく、日本化されつつあった〈南洋〉にも幻滅した。精緻な読解から浮かぶのは、〈南洋〉を前に、自らを見つめ直す中島の姿である。作者はそれを「批評性」という言葉で呼ぶ。同じく南方の台湾に疲れた心の癒しを求めた佐藤春夫の鋭敏な嗅覚と並べてみたくなる。

とはいえ、凡百の作家と比べれば中

島敦が抜きん出るのは、作品を読めばわかる。中島でさえからめとられるほど鞏固に南洋幻想が流布していたわけや、幻滅が創作に対し刺激をもたらす仕組みが気になる。南洋行の前から中島が文学的に完成していたなら〈南洋〉は想像上のそれで十分だし、あるいは幻滅しただけなら南洋を描く必要はない。幻想や幻滅こそ、実は文学を産み出す動機だったのではないか。

中島敦「寂しい島」は、死に絶えつつある島の最後の女の子が、「大輪の花」のような「美しく伶俐な子」ではなく、「愚か」で「平凡」だったことに失望する話である。しかし作品の眼目は幻滅になく、人類滅亡のあとに聞こえる「天体の妙な諧音」を、一人類として寂しく想像することにある。中島の批評性を読み解く本書を手には、幻想と幻滅のあとに中島が奏でる、うそ寒い、しかし妙な音楽はどう論じればいいのか、と思わされた。

(二〇一六年一月一日 翰林書房

二一〇頁 二八〇〇円＋税)

事務局便り

○献本のお願ひ

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

●対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

●送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

○維持会費納入のお願ひ

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。同封の振込用紙で、ご協力のほど、何卒よろしくお願ひします。

○関西支部二〇一七年度役員

浅子逸男(支部長) 斎藤理生(運営委員長) 泉谷瞬 磯部敦 奥野久美子 梶尾文武 加藤邦彦
木谷真紀子 黒田俊太郎 坂堅太 重松恵美 瀧本和成 田口律男 田中裕也 戸塚麻子 中谷いずみ
福岡弘彬 ホルカ・イリナ 増田周子 三品理絵 村田好哉 山本昭宏 山本歩

○日本近代文学会関西支部事務局

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学大学院文学研究科 斎藤理生研究室内